

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

《医療系》

●新潟大学医歯学総合研究科口腔生命科学専攻

「プロジェクト所属による大学院教育の実質化」の事例

(具体的に何を実施したのか)

これまでの大学院教育では分野完結型のタコツボ型教育が行われ、ほとんど組織的な教育研究が行われていなかったが、教員レベルでは分野横断的な研究が進められてきた。そのため、学際的教育カリキュラムの立案、管理、運営を教員個人から専攻全体で行うために、大学院教育課程を一元管理する大学院教育開発センター(本取組担当者の11名、特任准教授1名、特任助教2名、非常勤事務職員2名)を設置し、大学院シラバスの整備、コースワークを含む新科目の設定など、大学院教育新教育課程を整備し、大学院学生に良質な教育プログラムを提供する体制を整えた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

大学院教育開発センターを専攻内に設置し、大学院教育に情熱をもつ教員を特任教員として採用し、月1回のセンター運営会議を開催し、大学院学生のニーズの把握、教員個人への教育課程編成の助言、改善勧告ができる体制を構築した。また、大学院教育改善のために必要な知識、理論の修得のために特任教員のスキルアップを図ると共に、事務職員と協働して広報活動に傾注した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

本プログラムの管理運営が円滑化ならびに責任体制が確立され、大学院学生に良質な教育プログラムの提供を図る体制が構築されるとともに、個々の教員主体の教育からプロジェクト型教育に転換でき、教育の質の担保および大学院教育の効果的管理が可能となった。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

B. 円滑な学位授与の促進

②厳格な成績基準と評価基準の設定や学位授与プロセスの明確化

《医療系》

●新潟大学医歯学総合研究科口腔生命科学専攻

「プロジェクト所属による大学院教育の実質化」の事例

(具体的に何を実施したのか)

これまで各臨床系教育分野では専門診療科毎に臨床技能向上のためのプログラムが存在していたが、必ずしも明文化され、公表されていなかった。そこで、各年次及び大学院修了時の臨床技能の到達目標、到達のための方策、評価方法を明示した段階的な臨床コースワークプログラムを作成し、大学院教育開発センターでブラッシュアップ・改善し、印刷物、ホームページ上で公表し、学生に周知させると共に、教員の大学院教育への意識改善を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

臨床技能の到達目標、到達のための方策、評価方法を明示したパンフレットを作成するにあたり、各教育研究分野から提出されたプログラムを大学院教育センターでブラッシュアップを行う際、教員からのヒアリング、教授会での議論を行うことにより、教育課程編成に専攻所属教員が積極的に関与できる環境作りを行った。また、歯科は口腔という狭い領域を対象にしており、視聴覚教材の開発が学習の補助、臨床技能の向上に効果的であるので、先端的な歯科治療技術および新科目である基礎・臨床連続講義のデジタルコンテンツ化を進め、ホームページ上で公開した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

臨床技能修得・向上が不可欠な高度専門医療職業人を目指す学生にステップ毎の到達目標の周知ができ、また臨床技能のスキルアップおよび専門医資格修得までのプロセスの明確化ができた。また、視聴覚教材の整備により、自学自習のための環境整備を行い、学習効率の向上に繋がった。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

①FD体制の整備充実

《医療系》

●新潟大学医歯学総合研究科口腔生命科学専攻

「プロジェクト所属による大学院教育の実質化」の事例

(具体的に何を実施したのか)

大学院教育の改善を進めるには教員の意識改革が不可欠である。そのため、継続的かつ多様な内容による大学院FD・WSを展開すると共に、大学院学生にはスキルアッププログラムとしてFDに参加させ、教員と共に問題点の共有化、解決策の模索を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

FD・WSでは単に教育開発に主眼を置いたテーマを設定するのではなく、多岐にわたるテーマ設定を行った。また、大学院学生をFD・WSに教員と参加させることにより、教員と共に大学院教育の問題点を共有化し、解決策の模索を図るようにプログラム設定を行った。最終年度には国際シンポジウムを開催し、本取組の外部評価を行い、さらなる大学院教育改善の必要性を共有させるようシンポジウムプログラムの立案を行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

国際シンポジウム終了時に行った教員アンケートでは、84%がシンポジウム開催意義を肯定的に評価し、また内容については80%の参加者が分かりやすかったと回答した。本プログラムによる大学院教育改革が教員や学生に広く認知され、現状に対する問題意識が共有されていることを示していると思われた。また、大学院学生からも大学院教育改善に対する肯定的な意見がよせられ、シンポジウムが大学院学生にとっても、そのあり方を考える良い機会となったと考えられた。教員からは「海外のシステムが良く分かり、今後の参考となった」という意見が大半を占め、本学の大学院教育改革をさらに推進していくことが共通事項として理解されたと考えられた。